# 新世紀ミュージアム

## 明日の博物館
## Museu do Amanhã ／ブラジル

鈴木 紀（すずき もとい）　民博 人類文明誌研究部

**一際目立つ前衛的な外観を呈した「明日の博物館」は、今やリオデジャネイロの新しい名所のひとつとなった。最新の映像技術を駆使した展示には、来館者を飽きさせない工夫が随所にこらされている。そこで提示されるわたしたちの「明日」の姿とは。**

「明日の博物館」正面入り口（写真はすべて2018年撮影）

地球の大気を攪拌（かくはん）する巨大なサーキュレーター。この博物館を眺めたときのわたしの印象だ。「明日の博物館」はブラジル、リオデジャネイロ市の中心部、グアナバラ湾に突き出た桟橋の上にある。奇怪な白亜の建物は、スペイン人建築家サンティアゴ・カラトラバの設計である。二〇一五年一二月に開館し、翌年開催されたリオ五輪では、博物館周囲の回廊がマラソンコースの一部として利用された。この博物館のいちばんの特徴は、モノよりもアイデアを展示していることである。博物館の名称である「明日」とは地球の未来のことで、来館者は地球環境問題について学び、そのために何をすべきか考えるように促される。

### 展示の構成

わたしは二〇一八年一〇月一二日、ブラジルのアパレシーダの聖母の祝日に訪問した。博物館前の広場には入場券を買い求める家族連れや観光客の長い列ができていた。なかに入ると、正面に球形のスクリーンがあり、地球の気候帯、海流の動き、かつての大陸移動の経路等が投影されていた。常設展示場は、「宇宙」「地球」「人新世（じんせい）」「明日」「我々」の五つのセクションからなる。はじめに宇宙と地球の成り立ちが示された後、展示の中心をなすのは「人新世」セクションだ。人新世とはオランダ人化学者パウル・クルッツェンが提唱した概念で、二〇世紀半ば以降、人間の活動によって地球環境が激変し、あらたな地質時代がはじまったとする考え方に基づく。展示場では、マルチスクリーンで現代の人間活動とその環境への影響がわかりやすく描かれていた。

博物館内部の地球スクリーン

続く「明日」のセクションでは、わたしたち自身が地球環境にどれほどの負荷をかけているかを学ぶことができた。情報端末の前で、一週間に肉や魚を食べる回数、自家用車を運転する頻度、エンジンの排気量等のデータを入れていくと、その生活を全人類がおこなう場合に、地球が何個必要かという答えが返ってくる。いわゆるエコロジカル・フットプリント（人間一人当たりの自然環境への依存度を面積で示した指標）の数値が簡易的なプログラムで算出されるのだ。わたしもやってみたが、地球二・七個分という数字に驚愕（きょうがく）した。

### 人類の文化

「明日の博物館」には、少なくともふたつの点で民族学の発想が認められる。第一に、「地球」セクションのなかの「思考」コーナーである。ここでは地球の生物多様性とともに、人間の普遍性と文化的多様性を見つめようというねらいから、人間生活にかかわる基本的な概念がとり上げられている。例えばアイデンティティという項目では、特定の集団や文化に所属することはあらゆる人間に共通であるという説明がなされる。同時に、赤い服を着たイギリスのバッキンガム宮殿の衛兵たち、水色の手術着を着たリオデジャネイロの外科医たち、そして濃紺のスーツを着た若者たちが整列する日本企業の入社式等の写真が並び、アイデンティティの単位やそれを表出する手段が多様であることが示される。第二は、展示場最後の「我々」セクションにある木製ドームの中央に立つチュルンガとよばれる柱である。これは、オーストラリア中央部の先住民族たちが先祖から受け継いだ儀礼用の祭具だが、ここでは世代間の知識の継承、および人類とその文化の連続性のシンボルとして置かれている。来館者はこの柱を見ながら、博物館の展示を振り返り、一人一人がどのように地球の未来を切り開いていくかを考えることになる。

「思考」コーナーのアイデンティティに関するパネル

### 民族学展示の可能性

思い起こせば、リオデジャネイロは一九九二年に第一回国連地球サミットが開催された場所である。経済成長による物質的な繁栄という近代的な価値が再考され、環境とのバランスを考慮した持続可能な開発の実現方法が議論されたのだった。いわば人類史の転換点となった会議が開かれた都市に、この博物館は建つべくして建っているといえよう。

そうした博物館のなかに民族学的な展示があることに、違和感を覚える人もいるかもしれない。しかしこれは、地球環境の保全のためには、科学的な知識だけでなく、人類の文化的多様性を踏まえて諸民族の叡智（えいち）を結集することが大切であるというメッセージなのだとわたしには思われた。その意味では、「明日の博物館」は民族学の重要性を今日的な文脈のなかで再評価した博物館ということが可能だろう。

人造湖越しに海を臨む博物館の先端部